

消化器外科レジデントマニュアル 第2版

小西文雄 監修

自治医科大学附属さいたま医療センター一般・消化器外科 編著

＜書評者＞ 篠崎 大（東大医科研附属病院外科科長・准教授）

好評を博していた第1版の出版から4年を経て、自治医科大学附属さいたま医療センター一般・消化器外科スタッフの先生方が執筆し、小西文雄教授が監修された『消化器外科レジデントマニュアル 第2版』が刊行された。この本を一読すると、どこをとってもコンパクトな中に必要な知識やtipsを十二分に織り込もうとする強い意欲が感じられる。すなわち1語1語に至るまで無駄がなく、珠玉のエッセンスが込められている。

内容は、前・後半で総論と各論に2分されている。総論の冒頭では「術前検査の進め方」として日常行われる検査の種々のチェック項目が並んでいるが、1つ1つ実践していくことで外科医としての基礎の基礎を身に付けていくことができる。また、最近の診療で大きな問題となっている「インフォームド・コンセント」には比較的多くのページが割かれている。その中には、基本的要件はもちろんのこと、代理決定・文書の必要時とその形式・裁判事例・告知など、幅広くトピックスが取り上げられている。

類書ある中で本書に特徴的な点の1つに、内視鏡下手術についての項目が独立して存在していることが挙げられる。監修した小西教授は内視鏡下手術が十八番であり、日本の第1人者であることから、他の項目にもまして充実している。手技やインフォームド・コンセントのポイントまでわかりやすく記載されており、至れり尽くせりといえよう。

腹腔鏡手術のみならず、近年の消化器外科手術ではstapling deviceの上手な利用が必須となっている。しかし、意外にその種類や使用法などの記載は少ないのではないだろうか。この点、本書では第2版で新たに1項目を設けて、縫合・吻合器についても写真を多用し、ひと目で理解できるよう工夫されている。

後半の各論でも必要な内容は押さえつつ、かつ無駄のない記載をする方針が貫かれている。各臓器の癌では、大腸癌を例にとると、その内視鏡的診断の要点や標本の取り扱いに始まり、術式自体や大きく改訂された『大腸癌取り扱い規約』のupdateはもちろんのこと、術中損傷や合併症や感染対策、術

後化学療法・フォローアップのポイントまで幅広く網羅されている。さらに、大腸疾患の項には近年急増している炎症性腸疾患の治療では、外科治療のみならず最近の生物学的製剤を含んだ内科治療についても、要領よくまとめられていることが嬉しい。

虫垂炎が1項目として独立し、10ページが割かれている。また、巻末近くに肛門疾患がまとめて取り扱われている。この本の対象は外科専門医取得を目指す若い医師である。彼らが術者としてデビューする前には、いつ手術が当てられてもいいように普段の勉強をしておいてもらいたいが、いざ手術となると緊急であわただしい中で、もう1度確認しておきたい状況も生じるかもしれない。そんな場合にも本書は対応可能になっている。

いうまでもなく外科医は、術中・術前後を問わず瞬時の判断を迫られる事態が日常茶飯である。本書は外科専門医を目指す若手医師のみならず、あらゆるサブスペシャリティーを含んだ外科系の若い医師のポケットに常時入れ、十二分に活用していただきたい1冊である。

●B6変型 頁368 2009年
定価4,410円
(本体4,200円＋税5%)
[ISBN978-4-260-00851-8]
医学書院刊